

|||||  
書 評  
|||||

「ヒガンバナが日本に来た道」

有 蘭 正一郎 著

海青社 (1998) 103頁

この書物の表紙カバーには、ヒガンバナの写真が都合8枚載っている。花卉の形状までがはっきりとわかる1枚を除くと、いずれも道端にヒガンバナが咲き並ぶ光景である。そのうちで最も大きな写真には、今が盛りと言わんばかりにこの花が棚田のあぜ道を彩っている。秋の訪れを知らせてくれるヒガンバナは、比較的身近な野草にちがいない。しかし、表題には「日本に来た」とある。そうなのか、この花はもともと日本にはなかったのだ、と思いつつ裏表紙をめくると、「ヒガンバナの自生面積を測ってみませんか」とある。測ることで何がわかるのだろうか、と思いつつその箇所続きを読んでみた。

「ヒガンバナを通じて、文字がなかった時代のロマンに浸ることができます。ヒガンバナは古代の夢を誘う花です。」と記されている。畦に咲く花でロマンや夢が味わえるとある。どうやってそれができるのだろうか。表紙をめくると、4頁に渡って愛知県と静岡県で撮影されたヒガンバナの写真が掲載され、「はしがき」の冒頭でこの花が「日本で農耕が始まった頃に、中国南部から日本に渡来して半ば栽培され、のちに人里の雑草になった帰化植物」とあるという通説が紹介されている。なるほど、フィールドワークでよく目にするこの花はかなり古い時代にやってきたのである。

それに続いて「はしがき」には、自生地の分布と特徴を考察することを通じて、ヒガンバナの日本への渡来期と渡来経路について考察するという手順が示され、「ヒガンバナは、水田稲作農耕文化を構成する要素のひとつとして、縄文晩期に中国の長江下流域から日本に直接渡来した」という結論が明示されている。時代的には縄文晩期、地域的には長江下流域をも含む広い範囲で、この花が位置づけられるのである。たどり着く結論を念頭において、夢とロマンのこの書を読み進むことにしよう。

新たに書き下ろされた第1章と終章を除くと、第2章から第5章までは学会誌と著者が勤務する愛知大学の刊行物にすでに発表されたものに基づいている。章構成は次の通りである。

- 第1章 ヒガンバナの生活暦と自生地
- 第2章 豊川流域のヒガンバナの自生地と集落成立期との関わり
- 第3章 豊川流域のヒガンバナの自生地に関する補説
- 第4章 渥美半島のヒガンバナの自生地と集落成立期との関わり
- 第5章 ヒガンバナの渡来に関する諸説
- 終章 ヒガンバナが日本に来た道

第1章では、ヒガンバナの植物としての特質と、複数の学問分野でこの花に関して明らか

にされたことが要領よく整理されている。この花がどのようなイメージで見られてきたかについても、童謡と歌謡曲をもとに紹介されている。そしていよいよフィールドワークの始まりである。

「穀物の生産が不安定であった古い時代に成立した集落ほどヒガンバナの自生面積は大きい」という仮説のもとに、第2章の前半では豊川全流域が、後半では中下流域が対象とされた。学生19名の協力のもとに行われた調査の結果、自生面積の大きい集落には山麓緩斜面に造られた棚田型の水田が分布していることが判明した。次に対象地域内の集落が、その成立期をもとに六つにタイプ分けされる。すなわち、縄文期の遺跡がある集落、弥生期の遺跡がある集落、中世末までには成立していた集落、近世に成立した集落、近代に成立した集落、および成立期が不明の集落の六種である。そして自生面積と集落の成立期とが考察された。その結果、成立期の古い集落ほどヒガンバナの自生面積が大きい傾向があり、とりわけ縄文晩期の遺跡がある集落では特に大きいことが確認された。

中下流域に関しては土地利用と集落が位置する地形条件も勘案された。そうしてヒガンバナの自生面積と水田率とが関わらないこと、ヒガンバナは崖錘部に造られた棚田の畦に多く自生していることが明らかとなった。それ以上に重要な点は、自生面積の大きい集落の多くに縄文晩期の遺跡が位置することである。これを踏まえて著者のフィールドワークは、さらに豊川の上流域にも及ぶことになる。

第3章では、準平原上で縄文後期までの遺跡がある場所とヒガンバナの自生地は離れているが、縄文晩期の遺跡がある場所にはそれ

が多く自生していることが明らかにされた。続く第4章では渥美半島が対象地域とされ、豊川流域ほど顕著ではないにしても、成立期の古い集落ほどヒガンバナの自生面積は大きいことが確認された。

以上の諸点をもとに、次のような既往の説と著者の仮説とが第5章で対比される。ヒガンバナは、中国の照葉樹林帯において焼畑段階の農耕技術を構成する半栽培植物のひとつであったから、渡来先の日本でも人間が農耕をおこなうために開発した土地でのみ生育し、稲作が渡来して食物として価値を失ったのちにも、人里の雑草として自生してきた、といわれてきた。しかし著者は、常緑樹に覆われた林底では、ヒガンバナが食料になるほど繁茂しないこと、ならびに耕作放棄後数年を経た田畑にはヒガンバナは自生していないことを根拠として、上記の説を批判する。そしてヒガンバナは照葉樹林帯以外の植生の場所で自生していたとの解釈を示し、「照葉樹林帯」という枠を取りはずして考える必要を主張する。かくして、「はしがき」で示されていた結論に至るわけである。ヒガンバナの生態を詳細に検討したうえでの著者の舌鋒は鋭い。

著者が提示する仮説のキーワードは「縄文晩期」である。ただし、ヒガンバナが多く自生する棚田がある場所で縄文晩期に稲作農耕が行われていたと見なせるのかいなか、という疑問は避けられないように評者には思われる。著者自身も44頁でそのことに言及しているように、これは今後解明されるべき課題であろう。とはいえ、ヒガンバナの自生地分布と形成時期ごとに分類された集落の分布図と重ね合わせるといって著者の方法によって、読者は縄文晩期にまで遡り、そして照葉樹林帯

を越えた広がりを実感することができる。裏表紙にあるように、評者は比較的身近なヒガンバナを通して「ロマンと夢」を味わうことができた。

この書物のなかで、調査方法は極めて具体的に提示されている。結論に至る過程も明解である。そして先述のように、著者は読者にヒガンバナ分布調査への参加を勧めている。管見の限りでは、このようなことを著書で呼びかける例はあまりないように思える。著者は、一段高い所に身を置き「啓蒙」や「普及」をおこなうのではなく、読者とともに地面に立ち、観察と測定にいざなっているのである。読者は自ら自生地を調査することで、フィールドワークのおもしろさ、いいかえれば地理学の楽しさを実感できるはずである。そうならば地理学のファンはもっと増えるに違いな

い。発掘現場の現地説明会に大勢の人を集める考古学、衰退が言われながらも講座本があいついで刊行される民俗学、根強い任期の歴史学などに比して地理学がふるわないのは、この書物のようなセンスを持っていないからではないか。地理学を専門としない人々を、都市の探索へといざなう都市地理学者はこれまでにいただろうか。歴史的景観を如何に楽しむか、それが観察者をワクワクさせるものであることを、社会にむけて語ってきただろうか。「啓蒙」でも「普及」でもなく、ともに楽しもうとする姿勢があっただろうか。こんなことにまで思いをめぐらすのは、ちと深読みがすぎるかもしれない。それはともかく、来年の9月にフィールドに行く際には、折尺を忘れないようにしたい。

(立命館大学文学部 河島一仁 記)